

家庭科教育の昭和史とともに生きる―宮原小治郎小伝

## 第二部

# 『家事及裁縫』とともに (6)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

家庭科教育史研究とはじめ

「米国に於て家事教授が初めて行はれた、其始は、実に校内ではなく、従って、家事科が学校教科目に編入せられる迄には、永い歴史があるのである。而して、家事科中の或物は、夙に早く、女子のために授けられ、此科の発達の有様を一瞥する事は、誠に興味ある事柄である。」

これは、常見育男が『家事及裁縫』第一巻第四号に寄せた「欧米家事教授の沿革」と題した文章の書き出しである。この常見との出会いを小治郎は次のように記した。

「昭和二年本誌創刊の当時イの一番に鞭撻の書を送られたは常見育男氏である。その如何なる人物であるかを知らないから、早速小石川の仮寓を訪問したところ、何ぞ知らん高師

研究科の学生であって、その書齋には教育学の外に家事裁縫の書物が山と積まれ一意研究にいそまれているのにビックリした」(第二十二巻第二号)。常見自身も、半世紀を隔てた一九八一年に、投稿の二、三日後に「宮原さんが直接下宿先に訪ねてこられたのでびっくりした」と記している(第五十五巻第十二号)。こうして二人の長い付き合いが始まった。

先の書き出しが示すように、常見の最初の投稿論文は、文章家だった小治郎がよく掲載したと思うくらい今の水準で見れば生硬な文章だった。しかし、人を見る小治郎の鑑識眼は確かだった。五回に分載されたこの論文の文章は、回を重ねるごとに、見違えるように練り上げられていった。

常見の次の論文「本邦家事裁縫教授の沿革」は、二巻四号から三巻六号まで七回にわたり断続的に掲載された。この論文には、「他の諸学科の沿革については已に立派なる研究の結果を見ることが出来ますが、我が家事裁縫教授については遺憾ながら、これあるを聞かないのであります」と、いくらかでも本格的な家事裁縫教育史に初めて手をつけようとする若い常見の気負いがにじみ出ている。連載のはずが断続的になったのは、初めての試みだけに、苦しんだからであろう。

「本誌主筆宮原氏の御懇切なるおすすめ」でこの連載を書く、と冒頭に成立のいきさつが書かれている。小治郎は、家庭科教育史研究創始のきっかけを提供したわけである。

## 巨星墜ちる

常見による家事裁縫教育史研究の成果は、その後、「明治後半の家事裁縫教授」(三十一・十二)、「家事研究成立の過程」(四一三・十)、「家事科家政学の名称に就て」(四一六・七)、「大正時代に於ける家事教授の発達」(五一一・三)等としてせきを切ったように誌上に現れた。これらはいずれも雑誌の特集とは無関係である。小治郎の勧めで、常見の研究心がにわかに発酵し始めたごとくであった。こうして、科学的な家事裁縫教育史研究Ⅱ家庭科教育史研究が常見により緒に就いた。そして常見の研究関心は歴史研究を土台としてしだいに広がり、『最新家事教育原論』(一九三七年、創文社)、『日本家事教育発達史』(一九三八年、創文社)、等々の著書に結実していった。

筆者の調べでは、常見は戦前の『家事及裁縫』『家事裁縫』誌のみでも(すなわち戦後の『家政教育』『家庭科教育』を除き)、少なくとも六〇編は寄稿している。奈良女高師の『家事研究』には五編だから、著書を別とすれば、常見の研究発表の最も重要な舞台は小治郎の雑誌だった。

長年にわたる常見の歴史研究を集大成した『家庭科教育史』(一九五九年、増補版一九七二年、光生館)は、今なお後進が越えるべき大きな山として存在している。しかも、この著書の出版後も、実証的研究論文をなおいくつか発表している。

常見の数々の著書、論策は教師あるいは学校経営の激務の傍らまとめられたものであった。なお、公立の中学校、高等女学校教師を経験したのち養母の跡を継いで女学校の経営に当たってきた常見の経歴等については、目下のところ、『最新家事教育原論』の復刻版(一九八二年、第一書房)に寄せた石川寛子の解説が最も詳しいように思われる。

その常見育男が、今年(九二年)四月十八日、九十歳で長逝した。巨星が墜ちた。合掌。

常見は、小治郎について、「文筆に秀で、和歌をよくし、好んで全国各地を旅され、美しい紀行文につづって誌面を飾った。」「地方の隠れた研究者を見出し、その人物や業績を誌上に紹介した」。そして多分自分もその一人だったと書いていた(五五―二二)。常見は、近親者以外で雑誌創刊以来の小治郎の働きぶり、仕事ぶりを語り得る最後の人だった。

## 教育学を科学に

常見が家事裁縫教育の歴史研究に着手して間もない一九三一(昭和六)年十月、『岩波講座・教育科学』が刊行され始めた。同じ岩波書店が三年五月から刊行し始めた『日本資本主義発達史講座』は、いわゆる労農派との間で日本資本主義論争を呼び起こし、また山田盛太郎の『日本資本主義分析』や平野義太郎の『日本資本主義社会の機構』等の名著を産むなど、日本の社会科学の水準を一挙に引き上げた。この

『發達史講座』に比べると日本近代史上の影はやや薄いけれども、『講座・教育学』とこれに続いた『教育学辞典』全五冊の刊行（一九三六―三九年）は、我が国の教育学史の重要な画期となった。この二つの企画の成功は、教育学を科学にしようとする気運が鋭敏の教育研究者の間に強まっていたことを鮮明にし、かつそれが広範な教師たちに受け入れられたことを示した。常見の家庭科教育史研究も、教育学を科学にしようという流れの中で育ったとも言えよう。

これ以前の教育学は、一口に言えば、「教育勅語」を中心とし、絶対主義天皇制の教育理念を体现すべきことが要請されていた。この天皇制教学体制のくびきのもとにある教育学を科学にしようという動きが始まった。『講座』に「教育研究法」を執筆した阿部重孝、「辞典」の編者の一人であり「教育研究法」を担当した城戸幡太郎、そして『辞典』の編集幹事・留岡清男がこの動きを代表した。戦前日本の教育学の到達点を示すとされる阿部重孝については、近年ほぼ全集に近い著作集が刊行された（『阿部重孝著作集』全八巻、一九八三年、日本図書センター）。膨大な著作を遺した（城戸幡太郎先生著作・論文目録「城戸幡太郎先生卒寿記念」『北海道大学教育学部紀要』第四十四号、一九八四年）城戸幡太郎の教育学の現代的意義を問う研究は多い（例えば田中武雄「城戸幡太郎における教育科学論と制度構想」『金沢大学教育学部

紀要（教育科学編）第三十六号、一九八七年など）。これに伍して家庭科研究者による論稿（朴木佳緒留「城戸幡太郎における生活技術の教育」『神戸大学教育学部研究集録』第七十六集、一九八六年）があることも注目される。

#### 山本キクの苦心

教育学を科学にしようという主張を教科指導の領域まで貫徹し具体化することは容易ではなかった。例えば『教育学辞典』の「裁縫教材史」「裁縫教授」（いずれも成田順）、「家事教材史」（黒川喜太郎）は、事实上、教授要旨等の法令の解説に終始した。東京女高師の教授であると同時に女性初の文部省督学官でもあった成田に過大な期待を寄せることは、木に縁って魚を求めるようなことだったのかもしれない。

こうした中で山本キクが『講座』に執筆した「裁縫の教育」（一九三二年）は、苦心の作だった。山本は、『家事及裁縫』に創刊号から「裁縫教授法」を連載し、また、文部省著作の『裁縫新教授書』を批判的に検討する健筆を振るっていた。山本（旧姓吉田）は、一九一五（大正四）年に東京女高師技芸科卒業後直ちに母校の助教諭兼訓導となり、傍らさらに研究科に進み、一七年に技芸研究科を卒えた研究熱心な人だった。助教諭兼助教諭となり、将来を嘱望されていた山本が一八年末に退職したのは職場結婚のためと言われる。一九年四月から二七年五月まで女子美術学校教員、二七年五月から三

○年五月まで東京市立忍岡高女教諭兼東京市視学囑託となつた。この時期に小治郎に見いだされたことは前述した(本連載第一部第十二回)。その後四九年一月に文部省に入るまでの間、数校の女子専門学校教授を歴任した。

『裁縫の教育』の山本の論旨は、基本的には「家事及裁縫」誌上で述べてきたことの延長線上にあった。それは、当時の女高師教授や師範学校の教師たちをがんじがらめにしてきた教授要旨等の法令にこだわることなく、一、教科価値、二、服装文化、三、裁縫教育の対象、四、裁縫科の教材、五、裁縫教育の実際と直面して、という題目の下に独自の論理と体系を組み立てようとした努力の産物だった。デュイイなど西欧の学者の言葉を散りばめるなど、当時の教育学の流れに伍して行こうとする背伸びした姿勢もないではないけれども、「服装史上健やかな服装文化を建設せんとするのが裁縫教育の使命である」、「裁縫科に於ける教材は服装文化及びその製作に関する技術文化である」、「裁縫科を衣服科として、衣服の構成、服装文化に向かって刮目せしむべき」である、などの新鮮な主張が吐露されていた。裁縫科をして衣服の裁縫に關する知識技術のみならず、衣服それ自身に關する科学的知識を涵養する衣服科たらしむべきだとする山本の主張を、戦後になってからではあるけれども、成田順は高く評価した(「戦前の裁縫科のあゆみ」第三十卷第四号)。

#### 黒川喜太郎の衣類科構想

山本の『裁縫科の教育』の出た翌年、黒川喜太郎が「家事及裁縫」に「裁縫科改造案『衣類科』の主張」を連載した(七一三、四、五、六、七、一九三三年)。この連載は「一般裁縫教材の基礎的研究」など注目すべき実証的研究とともに黒川の『裁縫教授の新研究(一九三四年、培風館)に収録された。この著書によって黒川の主張を研究した加地芳子は、提案の十年後に「衣類科」に代って「家政科被服」という名称で、被服関係の総てをまとめた科目」が一九四三年の高等女学校規程によって設けられ、その「教授方針・時数には、黒川の提案が、ほとんど取り入れられ」たと述べ、黒川の先見性を高く評価している(家政学教育の史的研究(一)―黒川喜太郎の「衣類科」について)『大阪教育大学紀要第Ⅱ部門』第三十四卷第一号、一九八五年)。

小治郎の『家事及裁縫』は、時事的な解説と幅広い視角からの教材研究を主眼としていた。もちろん文部省の政策動向には敏感だった。しかしこれに終始することなく、常見のような当面の教材研究には汗遠に見える基礎的研究も大切にしていた。また女子教育という強固な枠組みの中にあっただけいえず、伝統の殻に閉じ込められぬこの教科を革新しようとする真摯な研究者たちの動きにも敏感だった。こうした鋭敏な編集感覚が雑誌の隆盛を支えていたと言えよう。